勤通大基礎理論スクーリングin しずおか

静岡県労働者学習協会静岡支部・静岡市社会科学学習会　　２０２１.7.7　No.2

人間とは何かを考える―第１章

科学的社会主義は人間解放の理論だ

７月６日アイセル21において、勤労者通信大学基礎理論コーススクーリングの第2回学習会が開催されました。今回の出席者は６名でした。

今回からテキストに入りました。今回の範囲は第１部第１章です。報告担当者は小見山氏でした。約一時間の報告を受けた後、討論で内容を深めました。まず報告の冒頭で、基礎理論コース全体の内容を確認しました。基礎理論コースでは「何を学ぶのか」を、目次も見ながら説明がされました。また、「科学的社会主義の基礎理論」の「3 つの源泉と 4 つの構成部分」について、いくつかの文献のコピーを資料として確認しました。この理論が政党（日本共産党）の理論的基礎となっていることも、「日本共産党綱領」の一部の資料を基に確認しました。第一部の内容に入ってからは、テキストを中心に必要な箇所を読む方法で報告がありました。第１節の31ページの、「労働が人間をつくった」の項では、エンゲルスの「サルが人間になるにあたって（ついて）の労働の役割」の著書が収録された本の紹介がありました。なお第３節は、持ち時間の関係でレジメを見ながらごく簡単な報告となりました。

以下は、討論時間での質疑･意見の一部です。

紹介されたエンゲルスの著書が収録された本

○エンゲルスの「猿が人間になるにあたっての労働の役割」を以前僕も何度か読んだが、その時の印象は、人間が頭脳を発達させたのは、直立歩行するようになって手が自由になった。その手の労働によって発達するようになったというものだった。それがこのテキストの34ページでは「石器をつくり、共同生活をする個体間の関係も、労働によって、群れ的なものから次第に学習や助け合いをともなう社会的なものへと変わっていきます。つまりヒトの生きる場は、

石器をつくるような技術的性質とともに、互いに協力し合うという社会的な性質をおびてきます。」というように、単に手が自由になっただけでなく、社会的な関係を強めながら人間が変化していくこが理解できた。

テキストの時代　日本では何時代？

○テキストの中に、「古代・中世・近世・近代・現代」とでてくるが、日本でいうとどの時代の事をいっているのか。

○古代は「奈良平安時代」、中世は「鎌倉から江戸時代」か。
○「江戸」は中世で、「江戸末期」は近世でいいのでは。
○大雑把にいえば、近代は「明治」から、戦後が「現代」となるのでは。
○「Society5.0」では、1が「狩猟社会」で、2が「農耕社会」で、3が「工業社会」、4が「情報社会」、5番目がこれからの時代となっている。そんな区分もある。
○日本の最初の階級社会は、農耕社会となっていく弥生時代頃から始まるとテキストのどこかで指摘されていた。
○ネットで見ると、古代は「古墳、飛鳥、奈良、平安」まで、中世が「鎌倉、室町」まで、近世は「安土桃山、江戸」まで、近代が「明治、大正、昭和初期」、現代が第二次大戦後となっている。

○なぜ同時期に生存していた、ホモサピエンスは生き残り、ネアンデルタール人は滅んだと、その理由は分かるが、それをどうして証明できたのか。
○道具の存在からではないか。

８月は第２章　いよいよ哲学を学びます

弁証法的唯物論とは？

次回勤通大基礎理論コーススクーリング

日時　8月3日（火）　午後6時30分～8時30分

場所　アイセル21　42会議室